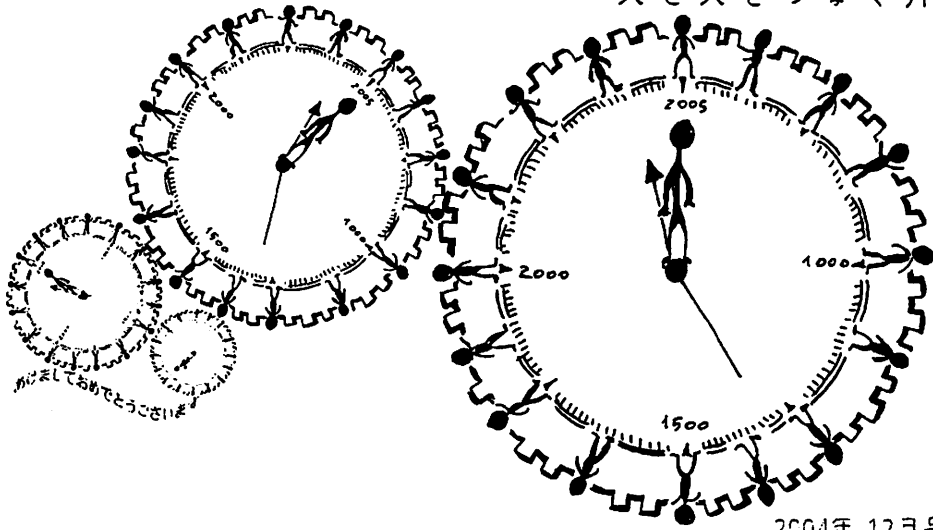


# やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



2004年 12月号 / 250円

編集部より	2
両親の権利	3
タフアツクル（熟考）	4
ドゥアー（お祈り）	6
足るを知る	8
祈りのある毎日へ	10
誉められることのない三つの集団	11
御自分の時代についての言及	12
科学：「計画的な雨」	13
お子さんを亡くされた方への哀悼の手紙	14
映画から考える：「翼のない天使」 Wide Awake	15
ありがたい痛み	17
真理を求める人の第二の階梯「努力（ムジャーハダ）」	18
ひよこ豆のカレー	21
善行	22
カレッジの小石／ちいさなわたしの、オクスフォード旅行記④	23
魔術と奇跡の衝突	25
アリときりぎりす	27
アスマの慈善の喜捨	28

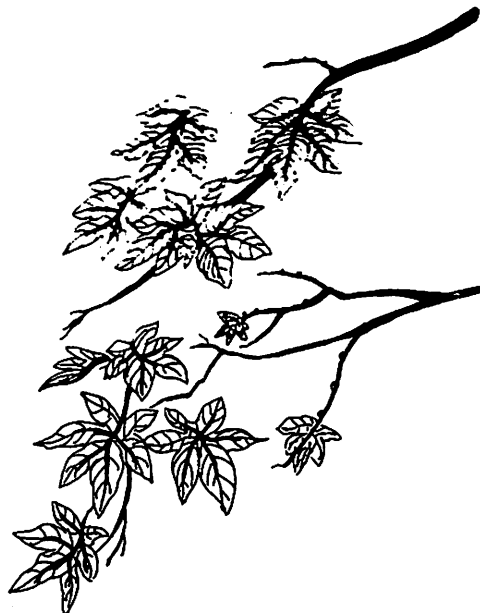


師走。今年一年の締めくくり、そして来たる新年を迎える準備で忙しい季節となりました。12月とは思えぬ暖かい日々が続く、今のうちと思立って少し早めの大掃除に取り掛かることに。電気の傘に積もった厚い埃を払い落とし、風雨にさらされた窓を拭いて外の新鮮な空気を取り入れると、部屋がさっぱりすると同時に自分自身の心まで清々しくなる気がします。

しかしふと立ち止まって考えればそれはやはり「気がする」までのこと。実際のところわが内面はどうなっているのか……。家の中では毎日掃除機をかけても、どこからともなく埃はやってきて次の日になれば薄っすらと積もっているのを目にします。私の心にも埃は積もってはいないだろうか、それどころか頑固な油污れや染みができたり、病気の原因にもなるカビが生えてはいないだろうか。物陰に隠れて気付かない積年の垢もありそうです。こうした汚れはいつどこからやってくるのでしょうか。

部屋は掃除をすればきれいになる、汗や埃にまみれた体もシャワーを浴びれば清潔になる。心も同じく汚れを落とす必要があるでしょう。しかしどのような方法で？外側に露出していないだけに掃除するのもやっかいに思えます。

まずは忙しい手をとめてじっくりと観察することから始めてみることにしましょう。欲望や怒りといった静電気がますます埃を引き寄せ、こびりついた汚れが曇りとなって外界への視界をさえぎらないよう、私の心も日々の掃除に加えて時には徹底的な大掃除が必要なようです。





両親は人間が第一に敬意を示さなければならない神聖な存在です。両親を尊重しないのであれば、それは全能の神に背いていることになります。両親を大切に扱わない人々はいつの日か他の人々からひどい扱いを受ける目にあうでしょう。

受胎した瞬間からその成長を通じて、子供は両親にとっての心配の種となり、責任という重荷が肩にのしかかっていくのです。両親が子供に寄せる愛情や慈悲の深さは到底計り知れません。また子供が原因で起こる問題や困難にいかにか耐え忍んでいるか、見当もつかないでしょう。これらの理由から両親を尊ぶことは宗教的義務であると同時に人間として恩義に報いて当然のことなのです。

両親を大切にし、それを神の慈悲を得るための道と考える人々は現世と来世の両方で最高の成功者といえるでしょう。反対に両親の存在を重荷とみなしたり疎ましく思う人々はきっと、人生でこの上ない苦難を味わうこととなるでしょう。

両親を尊重すればするほど、あなたの創造者に対する敬意や畏敬の念は増していくことでしょう。一方でもし両親にまったく敬意を示さないとしたら、あなたは神に対しても何の恐れも、畏怖も尊ぶ気持ちも持ち合わせていないことを意味します。しかし現代起きている奇妙な現象は、神を軽視する人と、自分は神を尊ぶと主張する人の双方が両親に背いていることです。

子供たちは可能な限り両親を尊重し、両親の言うことに従うべきです。そして両親は子供の身体的発達や健康に留意するのと同じくらい、道徳面や精神面における教育にも力を注がなければなりません。そして子供たちを立派な教師や指導者の元で育ててもらえるよう取り計らったほうがいいでしょう。子供の道徳面・精神面の訓練を怠る両親はいかに認識不足で軽率なことでしょうか。そしてそのような親の怠慢で放置され犠牲となる子供はどれだけ不幸なことでしょうか。

両親の受けるべき権利を省みず、両親に従わない子供は、人間性を失っただけのもの同然です。また子供たちの道徳的・精神的幸福を確保してあげない両親も無慈悲で残酷だと言えます。その中でも、子供が人間として完成への道を見出したにもかかわらずその子供たちの道徳的・精神的発展を無力化してしまう親ほど残酷で非情な親はいません。

家族は社会の基礎を形成します。家族のメンバーが互いに権利や義務を尊重しあえるような状況は健全かつ強力な社会から生まれます。そのような家族関係が失われてしまえば、その社会では他人に対する思いやりや尊重といったものが無くなってしまうことでしょう。





## タファックル（熟考）

タファックルという言葉は何かについて体系的に細かく考えるという意味ですが、ここでは、イスラームの生活の本質や光であり、心のランプや、精神の糧、知の精神となる熟考を意味します。タファックルは信仰する者が善と悪、有益と有害、美と醜を見分けるための心の中の光です。タファックルを通すことで、全宇宙は私たちが勉強すべき一冊の本となり、クルアーンの節はその深い意味と秘密を明らかにしていくのです。タファックルが存在しなければ、心は暗く、精神は落ち着かず、イスラームはその意味と深さを欠いて表面的レベルにとどまってしまうでしょう。

自分の周りで何が起きているのかに気づき、そこから結論を引き出すということにおいて、タファックルは必要不可欠な一歩です。それは経験というドアを開けるための金の鍵であり、真実という木が植えられる苗床であり、また心の瞳を開くということでもあるのです。預言者ムハンマド（彼の上に平安と祝福あれ）はタファックルにおいても他の善行と同様に他の誰よりも優れておられましたが、タファックルについて次のように述べられています。「タファックルほど報奨に値する崇拜行為はない。だから、アッラーの恩恵の深さとアッラーの力の偉大さについて熟考しなさい。だが、アッラーの本質について考えようとしてはならない。あなた方はそれについて考えることができるようにはならないのだから。」預言者ムハンマド（彼の上に平安と祝福あれ）はこの言葉でタファックルの価値について示すだけでなく、タファックルの限界を定義し、また私たちの限界というものを思い出させてくださっています。

この点について、アル＝ミンハジ（辿られた道）の著者は次のように書いています。

アッラーの恩恵について熟考することはこの道を進むための条件であるが、アッラーの本質について考えることは明らかに罪である。アッラーについて疑い、アッラーについて考えるということは、間違いであると同時に意味のないことであり、またすでに手に入れているものを手に入れようとしているということである。

『本当に天と地の創造、また夜と昼の交替の中には、思慮ある者への印がある。（聖クルアーン 3章 190節）』これは全宇宙という本について、それが創られた方法、その文字や言葉の特性、文章の調和と首尾一貫性、そして全体としての堅固さを示しています。クルアーンでは私たちにタファックルの最も有益な方法について示すために、私たちの注意を世界に向け、それについて熟考するように呼びかけています。クルアーンについて熟考し、学ぶこと、そして思考と行動すべてにおいてクルアーンに従うこと。全宇宙という本の中にアッラーの真理を発見し、新しい発見が本当に信仰する者を深め広げること、すなわち、信仰からアッラーの知識へと、そしてそこからアッラーの愛へと伸びる光に沿って、精神的喜びに満ちた人生を送るということ。そして、あの世での報奨とアッラーのお喜び、アッラーに認められることのために前進すること。これが完璧で普遍的な人間になる方法です。

タファックルはあらゆる科学的分野において使うことができます。しかし、前提や考えが間違っていない限り、合理的で経験主義的な科学は、タファックルの最終目的のための、すなわちアッラーについて知るための、第一歩もしくはその手段にしか過ぎません。全世界が一冊の本として研究されるのであれば、望むような結果と、絶え間ない情報とインスピレーションを得ることができるでしょう。しかしそれには、もしアッラーがすべての存在とその性質を創造されたということを認めたら、という条件がつきます。これは、すべてのものがアッラーに帰すると考え、アッラーの知識やアッラーの愛、そしてアッラーを常に心に留めておくことを通して精神的な安らぎを得た人々が、探し求め実行すべきことだからです。

タファックルはアッラーを創造主として信じることに基づき、そこから始められなければなりません。そうでなければ、その旅の途中でアッラーに手が届くように思えることがあったとしても、アッラーの存在と唯一性の確信以上のところへは到達することができないでしょう。アッラーが創造主で唯一の被創造物の管理者であると信じることに基づき、そこから始まっていることによって、タファックルは絶え間なく前進し続け深さを増していくことが可能になるのです。それは、アッラーの愛、「アッラーに自己を消滅させアッラーに服従すること」、物や出来事の背後にアッラーの真実を発見するといったようなことの中の新しい発見が、新しい次元へと広がっていくことになるからです。言い換えれば、タファックルがアッラーの美名のうちの「最初」や「外面」といった名前に気づくということから始まり、「最後」や「内面」という存在としてのアッラーに向かって進んでいくとき、人は途切れることなく終わりもない前進を続けることができるということです。ある決められた目標に焦点を当てて熟考することを人々に勧めるということは、すべての存在がどのように現れているかということの研究する科学の方法を学び使うように勧めるということをも意味するのです。

全宇宙と地球上のものはすべてアッラーの所有物であり、すべてがアッラーの王国であるので、それぞれの出来事や物、性質などを研究するということは、至高なる創造主アッラーがどのように被創造物を扱っておられるかということの研究することを意味します。存在という本を研究し、それを正確に理解し、それに従って人生を送っている信仰する者たちは、祝福されたカウサルの水を飲むことができる場所、楽園という最終目的地へと続く道を、案内と正しさに導かれて行くでしょう。迷い、破滅へと進む人々は、思慮がなく、世界の無限の美と恵みの本当の所有者アッラーに対する忘恩という穴の中を彷徨います。タファックルを実行しながら楽園へと続く道を行く人々は、アッラーを信じることの意味するところを完全に自覚し、すべての恩恵を与えてくださるアッラーを認識し、アッラーに従います。彼らは感謝するために恩恵を与えられ、恩恵を与えられたことに対して感謝し、そして天使たちや預言者たち、正直で誠実な信仰する者たちの足跡を辿って行き、アッラーの恩恵に感謝するために、アッラーのお喜びを求めるのです。タファックルという手段を使い、アッラーを思い出すことで、彼らはすべての障害を克服します。そして、必要な方法を使うことでアッラーに服従することを達成し、また服従することで自分自身をアッラーの力に委ねながら、最終目的地へと羽ばたいて行くのです。



## 行動や言葉によるお祈りによって、アッラーに庇護を求めなければならない

ジンたちや悪い魂たちの災いから身を守るために二番目に重要な要素は、ドゥアー(お祈り)を、しもべとしての務め的一部分、我々の武器として、常に欠かさずにいることである。そう、身を守る際には、態度も言葉も、内面も外面も、動作も言っていることも皆完全で一致していなければならない。

ドゥアーは、行動と言葉の二種類からなる。農民が畑を耕し、管理し、種を蒔き、水をやることは行動によるドゥアーである。それから手を差し伸べ「主よ、お恵みをお与えください。恵みの雨を豊かに下してください」と懇願することは、言葉によるドゥアーである。一つ目のドゥアーがなされずして二つ目のドゥアーが行われることは、人に何も獲得させない。逆に、ただ行動によるドゥアーだけでよしとすることは、幸運や恵み、さらにはしもべとしての務めを半端なものにしてしまい、これら全ての行動が、頭に1という数字のない0の行列のようなものになってしまうだろう。

例えば、一人の信者が「アッラーよ、信者たちに勝利をお与えください」とドゥアーをしたとする。これは素晴らしいことである。しかし、それで十分というわけではない。なぜなら、片方の翼だけで鳥は飛べないからである。預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)が、バドルの戦いの前に不足なく準備をされたこと、それからその存在の全てをかけてアッラーに向かわれ、ドゥアーをされたことは次のことを示す。行動によるドゥアー、すなわち要因の範囲においてやるべきことを行い、可能な限り要因に配慮し、それから言葉によるドゥアーのために手を広げるのだ、ということである。

このように、体に悪いところや病を見つけた時に医者にかかること、薬を服用することはそれぞれが行動によるドゥアーである。それに続けて、健康を与える存在であられるアッラーに手を広げ、回復を祈ることは言葉によるドゥアーである。時にはただアッラーに向かい、言葉によるドゥアーを行うだけで頭痛や歯痛が治ることもある。しかし時には、アッラーのお望みが他にあり、医者にかかることが求められる。預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)は「アッラーは全ての苦しみに方策を与えられる。治療を受けなさい」とおっしゃられ、行動によるドゥアーを我々に奨励されておられる。ただ、先にも述べたように、私たちは健康はアッラーからのものだとして認識し、しもべとしての務めとして言葉によるドゥアーを常に行うのである。ただ、時には、言葉によるドゥアーだけでは不十分なように、行動によるドゥアーも十分とはならないことがある。アッラーは、健康を、時には二つのドゥアーに、また時には一つだけのドゥアーに関係付けられる。全てがその御手のうちにあるのである。

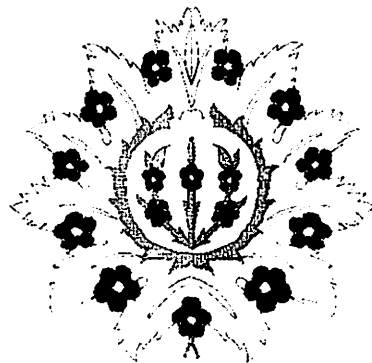
言葉によるドゥアーが何であるかを知りもしないにも関わらず、健康のうちに、楽しさに満ちた人生を送る人はたくさんいる。逆に、薬を服用し、常にドゥアーをしているのにも関わらず、かつアッラーに心から結びついている人であるのに、その人生が困難さに満ちていることもある。こういう状態に対し、私たちはドゥアーが認められなかったと考える。しかし、認めることとそれに応えることは別なのだ。全てのドゥアーは聞き届けられ、応えられる。しかしこの応答は、望まれたものがそのまま与えられると言う形でもありえるのと同様、遅らされ、後になって与えられることも、この世ではなくあの世で与えられることもあるのだ。これは完全に、アッラーの英知によるものとなる。あなた方が医者を呼んだなら、医者もそれに応じてやってくる。しかし「私にこれこれの薬をください」と言った場合、医者はその薬を

そのまま与えないことがある。適当と見なす薬が何であれ、それを与えるのである。適当と思えなければ与えない。もっとふさわしいもの、もっと効果があるものを与えるのである。私のこの比喩が誤りでないことを願うが、アッラーも、しもべのドゥアーを常に聞かれておられ、聞かれていると言うことを知らされ、しもべの心に安らぎをもたらされる。なぜならアッラーは、人にとって、大動脈よりもなお近い存在であられるからである。

しかし、その英知が要するところとして、しもべの求めるもの全てはお与えになられないかもしれない。これは、しもべにとって効果のあるだから、あるいは後でもっと適した形でお与えになるであろうから、である。富の持ち主はアッラーであられ、その富を望まれるままに処理されるのだ。恵みも、制圧も、どちらもよいものである。アッラーは無意味なことはなされない。何かをなされたとしたら、そこには千の英知が存在するのである。

さらに、絶対に知っておくべきことは、ドゥアーも、礼拝のように一つのしもべとしての務めだということである。純粹に、いつわりなく、別の意図など持たず、見返りを待たず、この世で前もって与えられる結果を待つこともなく行われるべきである。人は純粹で透き通った心でアッラーに向き合い、そのご満悦を求めなければならない。アッラーは時に、そのやさしさと気前よさによって恵みを授けられ、しもべを喜ばせられるのだ。だから、すぐに結果が現れるように、すぐに目的に到達できるようにと行われるドゥアーは承認されないかもしれない。純粹でアッラーのご承認を求めるものでないドゥアーは、承認という地点まで至ることが可能とならないかもしれない。

この世での前もっての結果のために何度もしつこくドゥアーが行われるべきではない。しかし、アッラーの扉においては絶え間なく、忍耐強く求めなければならない。アッラーにお助けを乞い願うことから一瞬でも遠ざからず、常に適したものを求めること、罪が枯葉のように舞い落ち、美德や人間としての価値を高めるその扉に信服すること、忍耐すること、そして我々が試練の場にいることを忘れず、結果をあの世において求めることが、誠実なしもべとなるために必要なのである。





最近の100円グッズのお店はとても充実している。「これが100円?!」と嬉しくなるものもある。店の中を見ているだけでもけっこう楽しめる。

この前、数珠コーナーに目に留まるものがあった。何と、タスビーフ(イスラームの数珠)を発見!「こんなものまで100円グッズにあるとは。誰が買うんだろう? どうしてここで売っているのだろうか?」とびっくり。ちゃんと玉が99個(33個×3)ついている。(なかには玉の数の足りないものや多いのがあるので買うときはちゃんと数えてから買ったほうがよい)。まさにタスビーフだ。

ルンルン気分になってお店の中をいろいろ見てまわった。そこでまた私にとっては思い出深い物を発見。それは石庭で有名な竜安寺にあるつくばいをかたどった灰皿だった。



そのつくばいには「吾唯足知(われただたるをしる)」と刻まれている。修学旅行でそれを見たときからずっとそのつくばいと刻まれた文字が心に残っていた。

この機会にまた考えてみた。

解説には「足るを知る者は貧しいといえども心は富んでいる、足るを知らぬ者は富めりといえども心は貧しい」とある。欲望を自制し、分をわきまえることの大切さを説いている。

これは禅の格言でもあるが、古今東西の賢人も同じようなことを言っている。老子は「禍は足るを知らざるより大なるは無い(最大の災厄は足るを知らぬ心に起因している)」「足るを知るの足るは恒に足る(足るを知るとはあるがままの現実に常に満足すること)」「足るを知る者は富む」と言っており、アリストテレスは「幸福はみずから足れりとする人のものである」と言っている。預言者ムハンマド(SAW)も「まことの豊かさは物資の潤沢さからのものではなく、心の豊かさからのものである」と言っている。人は不平不満を言いやすい。だからこそそれを戒める言葉も多いのだろう。

以前よく見ていた「心のともしび」という宗教番組

の冒頭に流れる「暗いと不平を言うよりもすすんであかりをつけましょう」という言葉も思い出される。口で不平を言うより、現状改善のために自ら行動し努力することも必要だ。また、もちろん不正に対してはただ黙って耐え忍ぶだけでなく、正していく努力が大切だ。

私も時には不満を感じ不平を言うこともあるが、アルハムドリッター、信仰のおかげですぐに自分の心を省み、心の持ちようを軌道修正することができるようになった。

中には常に不平不満ばかり言っている人がいる。足るを知らない人は一つ満たされても次から次へと新たな不平不満が出てくる。人の欲望はきりがない。いつまでたっても満足できず感謝を知らないことは不幸だと思う。

なぜ不平不満が出てくるのだろうか?一つには、それは人と比べるところからくることがある。自分が持っていないものを人が持っているとき人を妬み羨む気持ちが起こり、人と比べて自分の現状に満足できず足りないと感じるところからくるかもしれない。また、物事が自分の思い通りにならなかったり、自分の気持ちを勝手に人に期待し人がそれに応えられなかったりすると不平不満が出てきたりする。要するに我執にとらわれ自己中心的な状態のときに不平不満が出てくる。

しかしこのように感謝を知らず、足ることも知らず、心が欲望の虜になり不平不満に支配されていけば、結局の所、自分の魂を損ない、心を貧しいものにしていくのである。

日常生活の中で不満を探そうと思えばきりがないだろう。しかし不満を探す毎日より、満足を知って感謝する毎日のほうがずっとストレスもないし、幸せではないだろうか。

「全ては“アッラーの御心のままに”(インシャアッラー)」の気持ちがあれば、もっと気楽に過ごせるかもしれない。

もともと私たちは裸でこの世に生まれてきた。いま自分が手にしているものは全てはアッラーからのものであり、預りものであるという信仰をしつ



かり持つことが大切なかもしれない。しかし人間は弱いもので、真の持ち主であるアッラーがそのいくつかをとりあげるとたちまち人間は文句を言う。本当は全てをとりあげられなかったことに先ず感謝すべきなのだろう。

例えば、ある人が寒い冬の日に裸の私に下着と上着とコートのを貸してくれたとする。しばらくして持ち主にコートのを返して欲しいと言われれば、私は文句など言わずに今まで貸してくれていたことに「ありがとうございます」と御礼を言って持ち主に返すだろう。下着や上着まで返してと言われなかったとしたらそのことに感謝すべきだろう。

全てのものはアッラーからのものであるということを実に理解しているならば、それを返さなければならぬ時が来ても、本来アッラーに不満など言うべきではないのである。

人間はそのことをすぐに忘れ、あるいはそれがよいことだとわかっていてもなかなか自分をコントロールできない弱いものだが、信仰を持ち、アッラーに心を向けることによって、自己中心の囚われから開放されることできる。少なくとも正しい心のあり方は何かを知ることによって、それを知らなかったときよりもずっと幸福を感じて生きることができぬ。

人の魂は悪に傾きやすい。怒り、妬み、不平不満などの悪い感情がわきおこってくるのも我執があるからであり、そのような悪い感情に支配されないようにアッラーにドゥアーをして御助力を頼み、ズィクルをして自分の心(ナフス)を浄化(タズキヤ)させていきたいと思う今日この頃である。

\*\*\*\*\*

・本当に、現世の生活を例えれば、天からわれが降らせる水(雨)のようなものである。それで土を潤し、人間や家畜の食べ物のを茂らせる。大地が美しい装いで覆われて飾られると、そこの(住)民は、その全権を持ったと思ひ込む。だがわが命令が、夜も昼も一度下れば、昨日は繁茂していたはずのものが刈り取られた株のように変り果てる。われはこのように、熟慮する人びとのために(われの)印を解明する。本当にアッラーは、人を平安の家に招き、また御好みになられた者を正しい道に導かれる。(ユースフ章 10/24-25)

・本当に(人間の)魂は悪に傾き易く、主が、慈悲をかけられないならば(悪に陥ったかも知れません)。本当にわたしの主は寛容にして慈悲深くあられます。(ユースフ章 12/53)

・だが貪欲な者は、只自分の魂を損うだけである。(ムハンマド章 47/38)

・さて人間は主が御試みのため、寛大にされ恵みを授けられると、かれは、「主は、わたしに寛大であります。」と言う。だがかれを試み、御恵みを減らされる時は、「主はわたしを、軽視なさいませ。」と言う。(晩章 89/15-16)

・邪悪と信心に就いて、それ(魂)に示唆した御方において(誓う)。本当にそれ(魂)を清める者は成功し、それを汚す者は滅びぬ。(太陽章 91/8-10)

・あなたがたの努力は、本当に多様(な結果)である。それで施しをなし、主を畏れる者、また至善を実証する者には、われは(至福への道)を容易にしよう。だが強欲で、自惚れている者、至善を拒否する者には、われは(苦難への道)を容易にするであろう。かれが滅び去ろうとする時、その富はかれに役立たないであろう。(夜章 92/4-11)

・いや、人間は本当に法外で、自分で何も足りないところはないと考えている。本当にあなたの主に(凡てのものは)帰されるのである。(凝血章 96/6-8)

・アッラーのみ使いは「アダムの子は成長し老いる。しかし彼は二つ(の欲望)が彼を若くしている。(それは)財貨への欲望と生への執着である」と申された。(「サヒーフ ムスリム」第2巻 p.156)

・アッラーのみ使いは「たとえアダムの息子が豊かな二つの溪谷を所有していたとしても、彼は三つ目のそれも望んだであろう。アダムの息子の腹は土で満たされるまで(墓に入るまで)満たされぬ。アッラーは後悔する者をお許しになられる」と申された。(「ムスリム」第2巻 p.156)

・アッラーのみ使いは「まことの豊かさは物資の潤沢さからのもではなく、心の豊かさからのものである」と申された。(「ムスリム」第2巻 p.157)

・アッラーのみ使いは「イスラームに帰依した者、生活可能限度の糧を与えられている者、そしてアッラーがお与えになったもので満足している者は成功した者である」と申された。(「ムスリム」第

2 巻 p.160)

・アッラーが天国でアダムを形作ったとき、アッラーはみ心のままにそれを放っておいた。そこでイブリース(悪魔の別称)は彼(アダム)の周りを廻りながら彼を詳しく調べた。そして彼の空虚な内側を調べたとき彼が自らをコントロール出来ないように創られていることを知りました。(「ムスリム」第3巻 p.550)

・あらゆる困難や疑いや障害にもかかわらず、神に信頼しましょう。神は決してあなたを裏切りません。ある願いをかなえてくださらない時は、神がそのことをお望みではないというしるしです。もし神があなたにそれをしてほしいとお望みなら、神はその手段を与えてくださるでしょう。ですから、何も心配することはないのです。(マザーテレサ)

祈りのある毎日へ



・幽玄界を知り給うお方

罪を赦されるお方

欠点を覆われるお方

困難を取り除くお方

心を動かすお方

心を飾られるお方

心を光り輝かせるお方

心を癒すお方

心に住む最愛のお方

心の友

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 偉大なる鎮帷子(ジャウシャヌカビール)には、祈願(きがん)、唱念、教いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎮帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎮帷子のような精神的鎧が必要です。本来、偉大なる鎮帷子(ジャウシャヌカビール)が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



## 誉められることのない三つの集団

預言者ムハンマドは次のように言われている。

「三つの集団がある。アッラーは審判の日、彼らとお話しになられない。彼らを見られることもない。彼らの罪を晴らされることもない。そして彼らに厳しい罰をお与えになる。服のすそを引きずって歩く者、自分のよい振る舞いを恩に着せる者、品物を偽って売る者...」<sup>2</sup>

この日本語訳は、このハディースの簡単な意味を述べているに過ぎない。これは要約であり、方向付けでしかない。これらによって真実が探られるが、これら自体は真実ではあり得ない。聖クルアーンでさえ、その意味を追求する者は大きな間違いや誤解を犯さずにはいられない。聖クルアーンがアッラーからくだされたその形には奇跡的なものがあり、その意味をまとめようとするなら、それは皮をはぐのと同じような行為である。だから、大切なのは聖クルアーンやハディースのそのままの言葉である。我々も、ここでこのハディースの言葉を忠実に見ていく事にしよう。我々の祈りは、アッラーが我々の魂を飛躍させ給うことである。

「三つ」、これはここでは絶対なものとして、数だけが示されている。男性、もしくは女性、集団、などと読み取ることも可能である。さらに、この三人、もしくは三つの集団について、学者とみることも、無知な者たちと見ることも可能である。ここで注目すべきポイントは、それらが誰であるかということ以上に、その特質である。そのため、このハディースでも、その部分は特定されていないのである。

ここで「三つ」を示しているアラビア語は、限定されていない語であることが文法上明らかである。つまり、彼らは不明確な存在であり、彼らを特定する要素がない。彼らは軽蔑すべき立場にあり、価値を与えられていないのである。アッラーは彼らと話されず、彼らの顔を見られることもないのであるから、あなた方も彼らに興味を持ち、語り、彼らが誰であるか知ろうとする必要はないのである。彼らは敗北し、その心も死体の下敷きになってつぶれてしまった存在である。高貴で偉大な場所に対して全く資格を持たない者たちである。下劣という穴の中でのた打ち回っているのである。

この「三つの」という語の後に、三つの、現在形の動詞が続く。この三つの動詞は、先の三つの集団について暗い境界線を引く。人はこの三つの集団の暗い結末を目にするのである。



<sup>2</sup> Muslim, Iman 171-174; 参照 : Suyuti, al-Fath al-Kabir 2/57

## 御自分の時代についての言及

### 1. 若者の父親について

ブハーリー、ムスリムをはじめとする全てのハディースでは、共通してこの出来事が伝えられている。ある日、預言者ムハンマドは説教台にあがられ、視線を見えざる世界のほうへめぐらせて、立腹された様子を見せられつつ、聴衆にいろいろなことを語られていた。そして「今日は私に何でも聞きたいことを聞きなさい」と言われた。皆が質問し、預言者ムハンマドも答えられていた。その時、一人の若者が立ち上がって言った。「私の父は誰ですか、預言者よ」おそらく、ほんの少しであれ父親についてのよくないうわさがあって、この若者を苦しませていたのであろう。この時機会を得て、ガイブをもお知りになる（アッラーのお許しによって）預言者ムハンマドに自分の父が誰であるかを尋ねたのであった。預言者は答えられた。「あなたの父はフザーフェである」若者はもはや気が楽になった。なぜならこの答えが彼を満足させたのである。今後は、否定的なことを考える必要もなく、その父親の息子として名乗れるからである。

そして、このように皆が質問している時、預言者の魂の状態を最もよく理解した者、偉大なウマルは、突然立ち上がり「我々は、神としてアッラーに、教えとしてイスラームに、預言者として預言者ムハンマドに承服します」と言った。彼のこの心からの対応に、預言者はその心に満足を感じられた。

この出来事は、この日礼拝所を一杯にしていた教友たちの前で起こった。彼らは皆、預言者が述べられたことを認め、皆声もなく「あなたは正しいことを言っている」と認めていた。<sup>3</sup>

### 2. アブー・ジャハルの死について

ムスリムでは次のように伝えられている。聖ウマルは言った。

「我々はバドルにいた。預言者ムハンマドは、戦いのための作戦を確定され、戦いの場となるであろう所を見て回られていた。その時、また視線を見えざる世界の方にめぐられ、未来を見つめられながら、その手で地面を指し示され、言われた。

『ここでアブー・ジャハルが死ぬだろう。ここでウズバが、そこではシャイバが、死ぬだろう。ここはフリドが倒れる場所である』

実際はさらに多くの名を挙げられたのであった」戦いの後、ウマルは神に誓って言った。「預言者が、誰がどこで死ぬと示されたとおりに、皆その場所で死体となって見つかった」<sup>4</sup>

そう、人生を通して預言者とその言葉でもって認めなかった者たちは、死体となって結局預言者の正当性の証人となったのである。預言者が前もって知らされたとおりに、1センチも変わらずにその知らせは現実化したのである。

<sup>3</sup> Bukhari, Fitan 15

<sup>4</sup> Muslim, Janna 76,77



## 計画的な雨

今年は雨の日が多くて困っている人も多いかと思います。少し雨について考えて見ましょう。

地球上で生命の永続に最も重要な要因の1つは雨です。人間を含めて、すべての生き物にとって重要性を持つ雨についてクルアーンの種々の節で言及され、雨の形成について述べられています。その情報は14世紀前に人類に知る余地のない情報です。これは我々にクルアーンが神の言葉であるということを証明します。

## 雨の割合

ズーフルフ章で、雨が「適量」に送られた水と定義されます。節は次の通りです：

「また天から適量の雨を降らせ、それで死んだ大地を甦らせられる御方である。そのように、あなたがたは（墓場から）出てくる。」金の装飾（アッ・ズルフ）章11節

節で言及されたこの「適量」は2つの雨の特徴と関係があります。まず、地球上で降る雨の量は常に同じです。推測によると1秒間で1千6百万トンの水が地球から蒸発します。この量は1秒間で地球に降る雨の量と同じです。これは水がバランスよく連続的に循環していることを意味します。

もう1つの雨に関連した適量とは雨の水滴の落ちる速度についてです。雨雲の高度は最小でも1,200メートルです。この高さから放されると、雨のしずくとして同じ重量と大きさを持っている物が連続的に加速し、そして地上に時速558キロのスピード落ちると計算される。そのスピードで地面を打つと大きい損害を起こすでしょう。もし雨がそのように降ったら、すべての収穫物は破壊されるでしょう。また、住宅や自動車は損害を被うでしょう。そして人々は用心をしないで歩き回ることが不可能でしょう。これらの計算は1,200メートルの高さにおいて場合のことです。1万メートルの高度に同じく雨雲があります。このような高さから降ってくる雨のしずくが非常に破壊的な速度に達することができたでしょう。

しかし、これは雨が降る方法ではありません。雨がどんな高さから降るかに関わらず、地面に着くとき雨のしずくの平均速度はたったの8-10 km/hです。この理由は雨のしずくがとる特別な形式です。この特別な形式は大気の抵抗効果を増やして、雨のしずくがある速度の限界に達すると加速を妨げます。（今日では、このアイデアを使うことによって、パラシュートが設計されます。）

雨の適量とはこれだけではありません。例えば、雨が降り始める大気層の気温はマイナス40℃に達することもあります。それにもかかわらず、雨のしずくが決して氷微片に変わりません。その理由は大気中の水が純粋な水であるということです。よく知られているように、純粋な水が非常に低い温度においてさへほとんど冷凍できません。

## お子さんを亡くされた方への哀悼の手紙

### 第4点

もし此の世が永遠であり、人間が永遠に残ったとすれば又は永遠の別れが存在するとするならば、苦悩に満ちた悲しみを抱え、絶望し悲嘆にくれることは意味があることだったかもしれません。しかし、もともと此の世は客室であり、死去した子どもが行ったところがどこであろうとも、あなた方もそして私達もいずれはそこへ行く事になります。さらに、この死は彼にとって、特別ではなく、普通の道程です。そもそも一時的なもので永遠ではありません。行き先にはバルザフ（死後、最後の審判を受けるまで待っている所）があり、さらにその先には天国があり、そこで再会するでしょう。

「裁決は、アッラーに属するのである。(40:12)」というべきです。彼が与え給い、彼が連れ去り給います。「あらゆる状況においても、あなたを称えあなたに感謝致します。」と唱えながら、忍耐と共に感謝するべきです。

### 第5点

慈悲深き神の最も情愛細やかで麗しく快い愛らしい感情の1つである“いつくしみ”は効果的な薬となります。愛よりもより強いものです。いつくしみは真の主(アッラー)を見つける一番近い方法です。メタファー的愛（隠喩的愛）や現世的愛は多くの困難を経た後、真の愛へと向上し、真の主を見出させます。ところが、いつくしみによれば（困難なく）より短期間により純粋に心を真の主に結びつけさせる事が可能です。父親と母親というものは、我が子をまるで此の世の全てと感じて、

愛します。その子を彼らの手の中から連れ去った時、もし幸せで、真の信仰者達なら、此の世から顔を振り向かせ、最も恵みを与え給うアッラーを見出します。そして、こう語ります。「此の世はそもそもはかなく、心に留めるには価しない・・・」と。子どもがどこへいこうと、その行き先との関係を持つとうとします。そして大いなる精神世界を勝ち得ます。

迂闊な者達や反抗する者達は以上の5点の幸せな吉報から遠ざかります。彼らの状態がどれほど苦悩に満ちているかは次の例でわかります。年老いた女性が愛するかわいい一人っ子の死ぬ直前を目の当たりにした時、現世において、永遠に生きる事はないと判断します。そして、迂闊さと反抗心の結果として、死が無であり、永遠の別れを想像した場合、柔らかい寝床の代わりに墓の中の土を考え、迂闊さと反抗心によって、もっとも慈悲深きお方からの天国での慈悲や恵みの園(天国の恵み)を思い出さずに、どれほど苦悩に満ちた悲しみとともに、絶望し悲嘆にくれることでしょう。しかし幸福の原因である信仰心とイスラーム（の教え）は、篤き信仰者達に申し伝えます。「死ぬ直前を迎えた我が子の慈悲深き創造主(アッラー)は彼をこの汚れた世から連れ出し天国へ送り給う。あなたに対し彼を執り成す者となし、さらに永遠の我が子と為し給う。心配せずに、別れは一時的である。

「裁決は、アッラーに属するのである。(40:12)」「本当にわたしたちは、アッラーのもの。かれの御許にわたしたちは帰ります。(2:156)」と唱え耐え忍べ、」と・・・



## 「翼のない天使」 Wide Awake

11月も半ば過ぎると、街はほとんどがクリスマスに向けたイルミネーションや飾り付けで覆われ、だいぶ「年末」だな、という気分になってきます。それとともに、年内にやらねばならないことを思い出してあせったり、年賀状を書かねばと思ったり、私の場合は学生ですので、論文の締め切りが近い！と冷や汗がでたり、ばたばたとしてしまいます。12月を「師走」とはよく言ったもので、なんとなく忙しく12月を迎え、なんとなく忙しく1ヶ月が終わっちゃうのかな、と感じます。そんな時期ですから、ゆっくりと今年一年を振り返ったり、自分の生活や心について考えたりする時間はあまりありません。そういうときこそ、2時間なら2時間という決まった時間他の事を考えずにテレビの前に座ってひとつの話をじっくり見て、見終わった後自分や周りについて想いをめぐらすことの出来る映画、というのはすばらしいものなのかもしれないな、と思います（もちろん私としては映画館のスクリーンで見る映画の方がいいですが、映画館は自分の都合にあわせて上映してはくれません…）。人によって映画の好みはさまざまで、シリアスな映画はいやだわ、という人もいるとは思いますが、今月紹介させていただく映画『翼のない天使』はシリアスさとコミカルさが混じった、映像もきれいで考えさせられる大変素敵な話だと思います。

カトリックの男子小学校5年生のジョシュアは、おじいちゃんが大好きでした。ですがいつも一緒だったそのおじいちゃんが亡くなり、彼は不安になります。「おじいちゃんは天国に行けたんだろうか？」—お父さんやお母さんや学校の先生に聞いてもちゃんとした答えは返ってきません。その答えを探すために、ジョシュアはたった一人で神様を探すことを決意します。「神様をみつけたら、おじいちゃんはどうしているのか聞くんだ」—そのために彼は、さまざまな宗教の話の聞いたり、まねをしてみたりします。その過程で様々なものを見、得て行くジョシュアですが、神様は果たしてみつかったのでしょうか…。

この映画はカトリックの学校を中心に展開するため、基本はキリスト教を中心とした思想で描かれていますが他の宗教にも偏見が少なく、子供たちの聖書への疑問にもわかりやすい形で答えようという姿勢がよく見えます。ジョシュアの神様探しの旅においても、先生たちは真剣に話を聞いてくれます。ただ、そういう環境であっても、大人たちには神様を探すというのは「おかしいこと」と思われてしまいます。子供であれば、特に人種や宗教がさまざまな人たちがいる環境にあつては、「神様はどこにいるの？」「死んだ人はどうなるの？」という問いは全くおかしくないものだと思います。そしてカトリックの学校ですから、神を探すという行為は奨励されてもいいとも思うのですが、そうはいきません。「信仰」というものが「宗教上のルールを遵守するもの」になってしまっているのか、なかなかジョシュアの気持ちを理解できないのです。確かにルールはありますが、その意味を自分できちんと知ることによってより深く物事が理解できるのではないのでしょうか。子供は純粋に疑問を持ち、その答えを模索していける、というところでやはり素晴らしいものだと思います。ですが、そういった子供の純粋さに対し、きちんと接していけるのか、きちんと信仰とはどういうものかについて教えることが出来るのかとなると、私にはさっぱり自信があり

ません（幸か不幸か、まだそのような状況にはないのですが）。ですが、ジョシュアの持つ「子供らしい」疑問の数々は実は、ムスリムでない人からイスラームについて聞かれるときのものと大変似ているようにも思います。そうすると、子供がいる・いないは関係なく、自分の事としても考えないといけないな、どうすればいいんだろう？とってしまうのです。まったく、おちおち映画も見ていただけません。

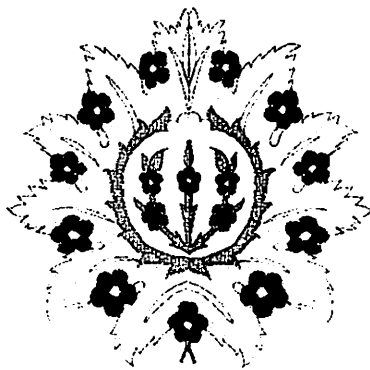
この映画はネタバレ禁止の映画なので、あまり内容について詳しいことは書けません。この映画の監督は『シックス・センス』『サイン』などのM・ナイト・シャマランで、これは彼の初監督作品です。以前私は『サイン』についてレビューをしました。そこにも通じる、思想に一本芯の通った監督だと思います。監督が最終的に何を言いたいのか？という事をよく考えながら、また、他の映画を見たことがある人なら共通点を探しつつ見るのもいいと思います。キーワードは「偶然=奇跡=サイン」でしょうか…。それと、Wide Awake という原題も、大きな鍵になっている事は間違いないでしょう。宗教が違うということや「天国に行けた」かどうかという表現を問題にするのではなく、とにかく見ていただきたい映画だと思います。

私の友人でも「クリスマス」というと「キリスト教でもないのに日本人は浮かれて！」と言う方も多い時期ですが、そういう時だからこそ逆に、宗教とは何か、信仰とは何か、人生とは何か…ということを考えて、大切な人たちと話し合ってみるのもいいのではないのでしょうか。

-----  
『翼のない天使』 1998年 アメリカ 87分 （日本未公開…ビデオやDVDで出ています）

監督・脚本：M・ナイト・シャマラン

出演：ジョセフ・クロス（ジョシュア）／ロージー・オドネル（シスター・テリー）／ロバート・ロジャア（おじいちゃん）他







私は2ヶ月前に腎臓結石で入院し、超音波で破壊してもらいました。退院後にはまるで何もなかったかのように普通の生活に戻ることができました。しかし、入院までの3週間くらいは本当に長く感じました。結石が原因の痛みで眠れない夜もしばしばでした。

大人ならだれでも似たような経験をしていることでしょう。頭痛、歯痛、腰痛、胃痛、関節痛など。場合によって痛み止めを飲んで痛みが取れます。身体のどこかが痛くて眠れない夜は本当に辛いです。皆さんはそんな時どういう気持ちになるか分かりませんが、私はこの痛みが迷惑だと思っていました。痛みさえなければと思っていました。

退院して、心に余裕が出来てから痛みについて考えてみました。もし身体のどこかに異常があつて、痛みがなければ私たちはきっとその異常に気づかないのではないのでしょうか。毎週、健康診断を受ければ気がつくかも知れませんが、毎週健康診断を受ける人はほとんどいないのではないのでしょうか。私がいらい迷惑だと思った痛みは脳と身体各臓器との間のいわば、体内健康診断のようのもので、痛みによって臓器が脳にSOSを送っているということです。痛みがなければ、私たちは身体に異常が起きてもそれに気づかず、ある日突然死んでしまったのでしょうか。痛いのは辛くても、本当に素晴らしいと思えました。

私の親戚の人や妻の友達の中に最近出産した人と今度出産する人が多くて、少子化問題で騒いでいる日本とは思えないくらいの出産ブームです。妊娠期間中に女性が経験する悪阻（つわり）で辛い思いをする人も多いでしょう。悪阻で寝込んでしまう人もいます。そういう人に限って、妊婦さんやおなかの赤ちゃんのためにおとなしくした方がいいから辛い思いをしてあまり動けないのではないのでしょうか。妊娠の初期は特に流産の危険性が多くて、また妊娠の初期に悪阻が多いようです。つまり、悪阻の痛みによって母子とも助けられているということです。実に素晴らしい自衛機構だと思います。

身体のどこかに痛みを抱えているとなかなか心に“この痛みが実はありがたい”と思えるくらいの余裕を持ってないのは人間です。せめて、また元氣に戻ってからでもいいからあのとき、痛みに助けられたと思えるようになりたいです。そして、この身体や時々感じる身体の痛みも全てがアッラーからの贈り物だと思えるようになりたいです。身体のどこかが痛い時はアッラーからの贈り物に対して“いやだ、痛〜い”などの愚痴もなるべく言わないようにしたいと思います。





## 真理を求める人の第二の階梯「努力(ムジャーハダ)」

アブー・サキーナ前野

クッラ アーミン ワ アントゥム ビハイ  
ル！(毎年皆さんが健やかでありますように)

ここシリアでは、先日 10 月 15 日(金)からヒ  
ジュラ暦 1425 年のラマダーン月が始まった。本稿  
が皆さんのお手元に届く頃には、そのラマダーン  
もすでに終わっていることと思うが、果たして皆  
さんは今年のラマダーンをどんな風にお過ごしな  
さったでしょうか。

「ラマダーンに入ると、シャイターン(悪魔)た  
ちは縛られて身動きできなくなります。そして天  
国の門は開けられ、地獄の門は閉ざされるので  
す。」とは、ブハーリーとムスリムが教友アブー・  
フライラに由来するものとして出典する預言者さ  
ま(祝福と平安あれ)のお言葉である。つまり祝  
福されたラマダーン月における怠慢は、あくまで  
自分自身の怠け心が原因でシャイターンのせい  
にはできない、ということだとも言える。シャイ  
ターンに邪魔されずに済むという意味では、いつ  
もより善行を積む上で「努力」しやすく、より純  
粋に自分の自我(ナフス)と向き合うことのでき  
る日々だと言えるが、果たして私たちはその機会  
を十分に生かすことができたでしょうか。

今回は、「クシャイリーの書簡」で言うところの、  
真理を求める者が辿る二つ目の階梯「ムジャーハ  
ダ(努力)」について、皆さんと一緒に勉強したい。  
まだまだ「努力」の足りない毎日を過ごしている  
私には、恥ずかしくて「努力」のなんたるかを語  
ることなどできないが、願わくはこうした先達の  
言葉を紹介する試みが、少しでもより誠実な「努  
力」を積み重ねてゆける契機づけとなることを祈  
るばかりである。

### ☆「ムジャーハダ」の徳

では、何よりもまず、至高のアッラーとその御  
使いムハンマドさま(祝福と平安あれ)は、「ムジ  
ャーハダ」について何とされているだろうか。  
数ある御言葉のいくつかをご紹介します。

至高のアッラーは次のように仰せられている。

『汝らのうち懸命に努力する者と、よく耐え忍ぶ  
者が誰であるかをアッラーが知られないうちに、  
汝らは樂園に入れると思うのか。』(3:142)

『汝ら信仰する者たちよ、アッラーを畏れ、かれ  
に近付くための手段を求め、かれの道のために努  
力しなさい。汝らはきっと成功するであろう。』  
(5:35)

『信仰する者、(信仰を守るために)移住した者、  
またアッラーの道のために自らの財産と命をかけ  
て努力した者は、アッラーの御許においては最高  
の位階にある。彼らこそは、至上の幸福を得る者  
たちである。』(9:20)

『アッラーの(道の)ために、限りを尽くして努  
力しなさい。』(22:78)

『われは汝らのうち、努力し、耐え忍ぶ者たちを  
区別するために、汝らを試みる。』(47:31)

『汝ら信仰する者たちよ、痛ましい懲罰から汝ら  
を救ってくれる取り引きを、汝らに示そうか。

汝らがアッラーとその使徒を信じ、汝らの財産  
と命をもってアッラーの道に努力することである。  
もし分かるならば、それは汝らのために最もよ  
い。』(61:10-11)

次いで預言者さまのお言葉をご紹介します。

教友イブヌ・マスウード(アッラーのご満悦あ  
れ)によると、「どの行いが至高のアッラーにとっ  
て最も好ましいですか？」という彼の問いに対し  
て、預言者さま(祝福と平安あれ)は次のよう  
にお答えなされたという。「時間通りの礼拝です。」  
「それからどの行いでしょうか？」「親孝行で  
す。」「それからどの行いでしょうか？」「アッ  
ラーの道において懸命に努力することです。」

(ブハーリーとムスリム出典のハディース)

それから、教友アブー・サイード・アル＝フ  
ドリー(アッラーのご満悦あれ)によると、預言

者さまが「最良のジハード」について聞かれたときのこと。「暴君を前にしての正義の忠告です。」と言われた預言者さまのお言葉に、アブー・サイードは涙したという。

(アブー・ダーウッド、イブヌ・マージャ、ティルミズィー出典のハディース)

またクシャイリー師が言うには、「最初に努力できない者は、この道（真理探究の道）で香りを見出すことはない、ということを知るがよい。」とのことである。

#### ☆「ムジャーハダ」の意味

少しここでアラビア語の「ムジャーハダ (Mujaahadah)」という言葉そのものに注目してみよう。

そもそも言葉の意味としては、「できる限りの力を尽くすこと」である。

一方、いわゆる専門用語としてイスラーム学の文脈においては、「ムジャーハダ」とはすなわち「自らの自我をそれが慣れ親しんだものから引き離し、常に自我の欲情に背くようにすること」を意味するという。（「ジハード」と同類の言葉である「ムジャーハダ」には、実際のところ文脈次第で様々な意味合いが込められているが、ここではその一つを紹介。）

#### ☆「ムジャーハダ」に関する、先達の言葉

－アブー・アリー・アッ＝ダッカーク師曰く、「自らの表面をムジャーハダで着飾る者は、アッラーがその者の内面をムジャーハダ（真理を垣間見ること）で美しくしてくれるだろう。至高のアッラーはこう仰せられている。『われのために懸命に努力する者たちは、必ずわが道に導くであろう。まことにアッラーは善い行いをする者たちと共におられる。』(29:69)

－アル＝ハサン・アル＝カッザーズ師曰く、「これ（タサウウーフ）は三つの事柄から成り立っている。

ひもじい時以外はものを食べないこと。睡魔に負けるまでは寝ないこと。必要時以外はしゃべらないこと、である。」

－ズ＝ン＝ヌーン・アル＝ミスリー師曰く、「アッラーがしもべを高める中で、しもべが自らの自我の卑しさを知らしめられる以上に誇らしいものはない。そしてアッラーがしもべを貶める中で、しもべが自らの卑しさから目を覆われる以上に卑しいものはない。」

－ムハンマド・ブン・アル＝ファドル師曰く、「慰めとは、自我の望みから解放されること。」

－アブー・アリー・アッ＝ルーザーバーリー師曰く、「三つのものが、人間に病をもたらした。自然の病気、習慣の追従、同伴者の退廃である。」

それを聞いたマンスール・ブン・アブディッラー師が、「自然の病気とは何ですか？」と尋ねると、「ハラーム（禁じられているもの）を食べること。」とルーザーバーリー師はお答えになり、「習慣の追従とは何ですか？」との疑問には、「ハラーム（禁じられているもの）を見たり、聞いたりすること。そして陰口のことだ。」と返答された。そして「同伴者の退廃とは何ですか？」という問いには、「心（ナフス）の中で欲望にせかされるたびに、それに従ってしまうことだ。」とお答えになったという。

－アン＝ナスラアバーズィー師曰く、「お前の刑務所は、お前の自我だ。だからそれから抜け出すことができれば、お前は永遠の慰めを見出すことができるだろう。」

－アブー・ハフス師曰く、「自分の欠点を知らない人は、すぐに身を破滅させてしまうもの。まことに違反行為（マアースィー）は、不信仰の道といえよう。」

－ズ＝ン＝ヌーン・アル＝ミスリー師曰く、

「人間に退廃をもたらしたのは、六つのものである。

一つ目は、来世での実りとなる行いをするにあ

たつての意志（ニーヤ）の弱さ。

二つ目は、身体が欲望を満たすための担保となつてしまったこと。

三つ目は、寿命が近いのにも関わらず、先延ばしばかりするようになってしまったこと。

四つ目は、創造主の喜びよりも、被造物の喜びを優先するようになってしまったこと。

五つ目は、自分たちの欲望に従い、預言者のスンナを投げ捨てるようになってしまったこと。

六つ目は、先達の思いがけない少しばかりの過ちをかさに着て、教訓となる数多くの先例を埋め捨ててしまったことである。」

## ☆反省と自戒

スプハーナッラー、ズ＝ン＝ヌーン師が指摘された六つの腐敗要因…その一つ一つに身をつまされる思いである。「来世での実りとなる行い」には様々なものがあるが、その多くを色々な言い訳をつけて無視してしまっていることの何と多いことか…。親孝行にはじまって、近所付き合い、一日五回の礼拝をマシドにて集団で行なうこと等々、反省すべき点ばかりだ。「わかっちゃいるけど、ちゃんとできない」善行の数々…習慣を乗り越えるべく「努力」すべきそれらの行いこそ、「努力の真価」が問われる対象だろうことはわかっている。よい習慣をさらに重ねることはそれほど難しいことではなく、「自我の克服」という本当の意味での「努力」が評価される対象かどうかは疑問だ。

では、どうすればよいのか？

きっとその答えのひとつとして挙げられるのは、ズ＝ン＝ヌーン師が指摘された残り五つの腐敗要因を逆に読み替えて是正することではないだろうか。（よりよく知るのは、アッラーなり）

- ①身体を欲望の奴隷とするのではなく、良心の助けとなる道具とすること。
- ②先延ばしすることなく、できるだけいつも「死」を意識して即実践を心がけること。
- ③何よりも創造主アッラーのお喜びを優先すること。

## ④預言者さまのスンナを尊重し、

表裏一体（表面的な事柄だけではなく、彼の人のなりにも見習うこと）の模倣を心がけること。

## ⑤先達の教訓を生かすこと。

言うはやすく、行なうは難しである。願わくはお優しきアッラーが私たちの弱さを哀れんでくださり、さらなるお慈悲とお力添えをお恵みくださいますように。

最後にひとつ、自戒もこめてご注意いただきたいのは、「努力に酔いしれてはならない。」という点である。「努力」を勧める本稿の結びとしては、いささか矛盾するように聞こえるかもしれないが、特に日本で生まれ育った「努力好き」の日本人が忘れてしまいがちな「努力の落とし穴」を思い出していただきたい。それは、「努力して善行に励んでいるワタシは偉い！他の人よりも優れている！」と思いがちになってしまうことだ。そうなるとタチが悪いのは、「できる人」が「できない人」を見下して断罪するという独善主義がまかり通ることで、同胞間のあるべき絆「愛と信頼の絆」が引き裂かれてしまうことである。

私たちが敬愛してやまない預言者ムハンマドさま（アッラーの祝福と平安あれ）…。彼以上にアッラーを愛し、彼以上にアッラーを畏れ、彼以上に努力して善行に励んだ人はいない。彼以上に「できる人」は過去にも現在にも、そして未来にもいないのだ。でもそんな彼は同時にまた誰にでも優しく、特に「できない人」に対しては格別に優しくかった…。

『かれら（主を畏れる者たち＝ムツクーン）は、夜間でも少しだけ眠り、また深夜過ぎ（ファジュールの少し前）にはお赦しを祈っていた。』（51:17-18）

主を畏れて努力を積み重ね、善行に励む者たちを描写する、至高のアッラーの御言葉である。彼らは夜間でも少ししか眠らず、深夜の礼拝に励むという努力を積み重ねることができていながら、

なぜなおもお赦しを祈るのだろうか？

それは彼らが自分の捧げた努力（ここでは深夜礼拝）は、アッラーに捧げるべきものとしてはまだまだ足りないと思なすからだ。どんなに努力を重ねても、しもべが主に捧げる奉仕としては至らないところばかり…自分に対するアッラーの恩恵に感謝を表明する行為としては、全然足りない…本当に主を畏れる者は、努力すればするほど「アッラーのしもべ」としての自覚を高め、主に対しても、他人に対してもより謙虚になってゆくということである。まさに「実るほど頭を垂れる」稲にも例えられるし、預言者さまはいみじくもムスリムを「なつめやしの木」のようだと言い表された。人に蹴られても実を落とし与えるだけで、砂漠の厳しい気候もなんのその。そしてその実は年中美味しく、栄養満点。常に優しく辛抱強く、

人のためになる存在…ムスリムはかくありたいものだ。

私たちが努力して善行に励むことができるのは、ただひとえにアッラーのお慈悲とお導きがあつてこそこの話である。またしても言うはやすく、行なうは難しの道ではあるが、願わくは至高のアッラーが私たちの至らなさをお赦しくださり、本当の努力と謙虚さをお恵みくださいますように。アーミン。

#### 《参考文献》

復刻版「クシャイリーの書簡」P.217-223、アブドゥルハリーム・マハムード博士+マハムード・ブン・アッ=シャリーフ博士/文献確証・注解 2002年ダール・アル=ファルフル版



## レシピーコーナー

### ひよこ豆のカレー

<材料：4人分>

- ・ ひよこ豆 120g
- ・ カレーベース《玉ねぎ 600g、トマト（水煮缶詰）250g、クミンシード小さじ 1/2、サラダ油 2/5 カップ》
- ・ 香辛料《コリアンダー大さじ1強、クミン(粉末)・レッドペッパー・ターメリック各小さじ1》
- ・ ガラムマサラ小さじ1
- ・ 塩小さじ 1/2

<作り方>

- ① ひよこ豆はたっぷりの水に一晩つけてもどし、柔らかくゆでます。
- ② カレーベースを作ります。玉ねぎはみじん切りにします。厚手の鍋に油を熱し、クミンを炒めます。クミンの粒がはじけはじめたら玉ねぎを加え、強火で 10 分ほど炒めます。玉ねぎの水分がとんだら弱火にし、あめ色になるまで炒めます。トマトを加え、油がにじみ出てくるまで、さらに 10 分くらい炒めます。
- ③ カレーベースに汁気をきったひよこ豆、香辛料を加えて、中火で炒め合わせます。
- ④ 水 4 カップと塩を加え、中火で 30 分ほど煮込みます。ガラムマサラを加え、さらに 10～15 分煮て仕上げます。

★ひよこ豆は、ガルバンゾー、チャナ豆、エジプト豆の名でも売られています。ほくほくとした淡白な味が特長で、カレー以外に、スープや煮込み、サラダなどに使います。



新たな年がくると、目標を立てますが、私の家ではハディースを目標のように掲げています。ハディースは預言者が行ったこと、話したことをもとにしていて、ムスリムはそれを見習うべきですから、ハディースは私たちにとって目標のようなものでしょう。その目標に向かって進めば、預言者のように正しい道を歩めるでしょう。インシャアッラー。ハディースのなかには、次のようなものがあります。

「あらゆる人間のすべての手足の骨は、日が昇ったら毎日施しをしなければならない。相手ときちんと付き合うことも施しなら、ひとがのりものに乗るのを助けたり、そこに抱き上げてやったり、持ちものを渡してやることも施しである。優しい言葉も施しなら、礼拝に赴く一歩一歩も、道路から危険なものを取り除くことも施しである。」

このハディースは人間が常に善い行いをすることを表わしていますが、毎日毎日善行を積むことを目標にしていれば、自然とそういう行動が身についてくるものです。ある日、自転車をこいでいると、大きな石が落ちていましたが、私はそれに気づいて避けて通りました。しかし、その時日は沈みかけていたのでその石を道から取り除く為に自転車を降りることなく家に帰りました。もしこの後暗くなってから、誰かがこの道を通ればその石に気づかずに転んでしまうのではないかとずっと気になってその日を過ごしました。

次の日にまた自転車でその場所を通るとまだその大きな石が落ちていたので、すぐに道路の脇に寄せました。その日とは別の日に、台風かなにかで、雨が激しく降った日の次の日に、道路に木の枝が落ちていた時がありました。私はその日も自転車に乗って出かける途中でしたが、道からその落ちていた木の枝を取り除いている人を見ました。大きな石を道から取り除くことができなかつた日、私はこの台風の次の日に見たことを思い出していました。ハディースには特別なことが言われているのではなく、ごく当たり前の善行について言われているのだな、とその時実感しました。

ムスリムではないその人の行動から、人間はもともと備わった知恵のようなもの、素直に善行を行おうとする知能があるのだ、と改めて思い直しました。人間は生まれる時、ムスリムとして生まれるが、成長する過程で、いろいろな影響を受け、ムスリムという立場から遠ざかっていってしまうということを知ることがあります。確かにムスリムではない人々、他の宗教のもとに生きている人々と接しても、ムスリムのような感じの瞬間がたくさんあります。あるいはムスリムと共通した部分があるのだと感じる時もあります。善行を積むことは人間が生まれながらにもった特質であり、能力としてすでに備わっているものであり、私たちを取り巻く様々なものが人間の善行を積むという行動を妨げていることもあります。

例えば、時間にしばられていて、善行を行う時間を失ってしまう。あるいは、自己利益だけを求めた結果、他者を思いやる気持ちを失ってしまう。といったことは日常生活を省みるとしばしば見受けられます。別のハディースで、ある男が預言者にアッラーも人々も私を愛すような行いについて尋ねたところ、「現世から身をひけば、アッラーはお前を愛されるだろう。人々が所有しているものから身をひけば、人々はお前を愛すだろう。」と言いました。このハディースはそんな毎日の生活だけに縛られないように警告したもののなのでしょう。



## カレッジの小石～ちいさなわたしの、オクスフォード旅行記～4

樋口 ともえ

マレーシア航空を使っの、イギリスへの旅行で最初の難関、それはマレーシアへの「着陸」だった。

どうでもいいことだが、私は飛行機に乗っている時の中で、着陸する時が一番苦手である。それには一応理由がある。

あれは修学旅行の時だった。

日本に帰って来た時に、珍しいことが起こったのだ。その時はだいぶ気流が荒れ模様で、着陸以前の高度を下げる段階ですでに何か、「無理矢理感」が乗っていて感じられた。がんばってがんばって下げている、という感じである。そしてそのまま、飛行機は着陸態勢に入った。窓の外の景色が、だんだん下がっていく。ものすごいスピードを急に実感する。ついに地面が見える。地面、地面、地面、まだ着陸しない。地面…地面…海。えっ、海？落ちる！！

と思った瞬間、ガクンと傾きが反転し、飛行機は下りるのをやめ、再び飛びたっていた。ものすごい角度がついた状態のまま、荷物が滑っている音を聞いた。座席に張りつけられている状態のまま、しばらくは声が出なかった。それから、あれよあれよと言う間に、飛行機は元来た道を戻り始めた。「着陸のやり直し」である。

それから、30分くらい経って、飛行機は再び着陸態勢に入った。その間、シートベルトサインは点灯し続け、乗務員さんも全く姿を見せなかった。どうしてもお手洗いにいきたくなった同級生が何人か、相談をしに行つたぐらいである。揺れて揺れて大変な状況の中、大変怖い思いをしたということだった。そして二度目は、「無理矢理感」が前より増しつつも、着陸ができたのだった。

あの時の、一瞬「えっ、海？」と思った感覚は、忘れられない。

そんなこんながあつて、着陸は苦手なのだった。今回も、高度はすごく高いし、「気流が荒れている」とか何とか言う、アナウンスもあつたので、どうなるのだろうと思った。

案の定、ものすごく揺れて、ビュンビュンと映画みたいに飛んでいるイメージが自分では浮かんた。そしてある程度下がった時点で、今度は急に耳が痛くなった。全員ではないようだったが、周りにも耳を押さえて「何、これ…」と痛がっている人が大勢いた。私はその時、焦ってしまって、耳から空気を抜こうとしたり、余計なことをしたせいかさらに痛くなった。激痛である。こんなに耳が痛いまま旅行を続けるのかと思うとゾーンとした。顔が熱くなって汗もかいた。そんな状態が15分くらい続くと、さすがに客室内はシーンと静かになった。

飛行機は時々、エレベータのように垂直に下りているみたいな高度の下げ方をしながら、着実に降りていく。静かなので余計、揺れている感覚が気になる。必死で我慢、我慢だった。下がるたびに雲が切れていき、緑がいっぱいのはじめてのマレーシアの景色が見え始めた。素適な風景を楽しむ余裕はあまりなかったが、それでも嬉しさ、ワクワク感で胸がいっぱいになった。

それからさらに15分くらい経って、飛行機は無事、マレーシアの地上に降り立った。半分フラフラしながら、今はとにかく揺れていないことが幸せとばかり、私もさっそく歩き始めた。気がつくとも耳の痛いのが、嘘のように消えていた。

飛行機から空港に移ってすぐ、結構湿気があると感じた。それに、暖かだった。3月・早春の日本

から来たのでギャップが激しいのだ。手に持っているモコモコのコートがやけに違和感を醸している気がしてきた。でも、自分はこんなに長い旅行をしたんだなあと思うと、すごいなあ、と思えた。だが、明日もまた飛行機に乗るんだぞ、と思いつくとため息をついてしまった。

チケットの都合で、マレーシアに一泊するので、入国の手続きをして、荷物を受け取った。標識のサインが分かりやすくて良かった。夕ご飯には少し早いぐらいの微妙な時間帯で、これからどうしようかと考えた。飛行機ですごく疲れたし、とりあえず落ちつきたいと思ったので、すぐにホテルに行くことにした。

ホテルに行くのが一苦勞だった。空港のすぐ近くのホテルで、送迎バスもあるということで決めたのだが、バスの乗るポイントがはっきりしなかったのだ。いや、本当ははっきりしていたのだが、私が一人不安になってしまったのだ。

一応、この階だと思われるところに行き、ご丁寧にホテルの案内の人にまで尋ねたのに、すぐにバスが来ないので妙に不安になった。30分に1本来ると教えてもらって、外は暑いから、涼しい中で待てば良いのに気になって何度も外へ出てしまう。この不安はどこから来るのだろうと考えてみると、それは、言葉の不安からだ。

相手の言うことが分からないわけでもない。頭では分かっているのだが、本当にちゃんと分かっているのかやけに不安になってしまうのだ。特に、空港に降りたってから聞いた英語は、いつもの感

覚と多少違っていて、それが余計に不安を増した。また、知らない国に一人だけにいることは、学校の授業などとは訳が違う。自分が言葉のやりとりで判断し、する行動が、全部実際のできごととなって自分にはね返って来る。そのことを急に痛感した。そしてまだ、余裕がなく、楽しむというよりは不安で仕方なかった。

雨が降ってきた。日もわずかに暮れ始め、何となく寂しい感じがしてきた。だんだん周りに人が集まり、もうすぐバスが来そうだと、思うと来た。あんなにうろちょろしたのは自分でもおかしかったなあ、と思った。

バスに乗ろうとした時、キャリーバッグの取っ手を収納できずにまごまごしてしまった。どうにもならないので、あきらめてそのまま持ち上げようとしても、バスの段が高くて、私の腕の長さでは持ち上げられない。どうしてこんな時に限ってこんなことになるんだ！ どうしよう…と思ったら、おじさんがさっと手伝ってくれた。「私ったらもう、はるばる遠くまでやって来ても、しくじってばかりいるんだから…」と思いつつも、その人の親切がとても嬉しかった。

雨の中、広い広い空港の敷地内を、バスは走っていった。ほどなく、平屋建ての、たくさんの家が集合したような建物が見え、それが私の行こうとしているホテルだと分かった。ようやく、ここまで来れて良かった、と思った。降りる時も、同じ人がさっと私の荷物を下ろしてくれた。  
・・・つづく







預言者イーサーがエジプトを支配するファラオになる 1400 年も前、エジプトの支配者はファラオとして知られていました。この時代のファラオは Ramusus II でした。彼はとても横柄で、彼自身を神であると主張していました。冷酷なファラオはイスラエルの人々に苦痛を与えることに喜びを感じていました。王室に属する星占い師はいつかイスラエルの民の家族に一人の子供が生まれ、その子供が成長した時にファラオを倒すだろうと予言しました。

ファラオはその予言を恐れ、イスラエル民の家族から産まれた子供全てを直ちに殺してしまうように命令しました。気高いイスラエルの民の家族に輝かしい子供が産まれました。彼はムーサーと名付けられました。冷酷なファラオの部下がこの子供を見つけたので、ムーサーの母親は産まれたばかりの子供を木製の箱に入れ、ナイル川に流しました。ナイル川からファラオの庭に水を引いていたので、ファラオの妻は庭にいる時に川に流れる子供を見つけました。その子供を気に入ったファラオの妻はその子供を養子にすることに決めました。ムーサーは豪華な宮殿で育てられることになりました。

快適な宮殿の生活の中で、ムーサーはたくましい若者に成長しました。ある夜、ムーサーは宮殿から抜け出し、道をぶらついていました。Qibit とイスラエルの民がお互いに喧嘩していたので、ムーサーは仲介に入りました。その時、ムーサーは Qibit 故意に危害を加えてしまいそれが原因で死んでしまいました。ムーサーは恐くなって宮殿へ急いで引き返しました。しかし次の日には Qibit の殺人の秘密がもれてしまい、ムーサーは絞首刑の判決になりました。その判決を逃れる為、ムーサーは宮殿から逃げ出しました。

何日かの逃亡の後にムーサーはある地域にたどり着きました。その地域の近くの村には預言者 Shuab 住んでいました。ムーサーの性格を気に入った彼は、ムーサーに彼の家族の世話をするように雇いました。それから 8 年後、彼の娘のうちの一人とムーサーは結婚しました。その後二人の間に愛らしい息子が産まれました。

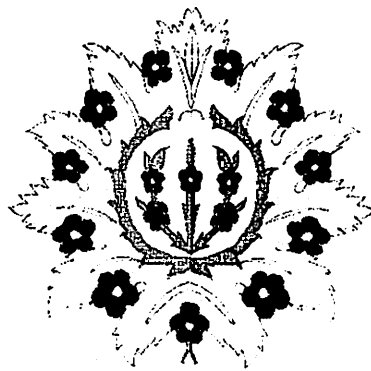
ムーサーは彼の家族と共にエジプトへ帰る旅に出ました。それは寒い冬の夜でした。ムーサーは彼の家族が暖まれるように火の炊いてあるところを探していました。彼はある山にある光を見つけ、その時、ムーサーは全能の神から預言者性と奇跡を与えられました。その奇跡のうちの一つは、預言者ムーサーが彼の杖を地面になげると、その杖がニシキヘビになったことです。もう一つの奇跡は彼が脇の下にしばらく置くと、彼の手のひらが輝きました。そして預言者ムーサーは傲慢なファラオを更正させ、導く為に赴くように導かれました。

預言者ムーサーがエジプトに到着した時、横柄なファラオはムーサーの奇跡と説教に少し心を動かされました。一方、ファラオは魔術の能力のあるものすべてを集めて、ムーサーとの魔術の対決を用意しました。この対決は激しいものとなりました。魔術師がロープを床に投げると、ヘビのように動き出し

ました。預言者ムーサーが彼の杖を床に投げると、巨大なニシキヘビになり、そのヘビをがつつと食べてしまいました。ファラオが集めた魔術師はその預言者の能力に魅了されてしまいました。彼らのすべては後悔からその時にムスリムになった者もあれば、後にムスリムになりました。強固なファラオでしたが、このような結果にひどくうろたえました。そしてファラオは預言者ムーサーを暗殺する計画を立てました。

その間、預言者ムーサーは彼の従者と共にエジプトをあとにするように導かれました。その知らせを聞いたファラオは、武装した強い軍をムーサーの後に追わせました。その頃、預言者ムーサーは紅海の岸にたどり着きました。彼が彼の杖で海面を打つと、波が起こり、高い壁のように二つに分れ、こうしてつかの間の細い道ができました。預言者ムーサーとその従者は安全にその道を通り、もう一方の岸にたどり着きました。預言者ムーサーを追っていたファラオはその海にできた細い道を見つけ、一歩踏み入るとたちまち両方に分れた海が勢いよく覆いかぶさりました。横柄なファラオとその一行は激しい波に溺れてしまいました。

歴史家はこの出来事が紀元前 1440 年に起きたのではないかと考えています。ファラオの一軍は漂流しながら岸にたどり着き、生き残った者によってエジプトの慣習に習いミイラにされ、宮殿のように素晴らしい墓に置かれたとされています。1898 年には考古学者がこの墓を見つけました。彼の遺体の表面には塩の層が付着しており、その事実が、このファラオが紅海で溺れ亡くなったことを証明しています。





## アリときりぎりす

夏の太陽がじりじりとてりつける中、はたらくありさんたちにきりぎりすが声をかけました。「ありさん。この暑いのははたらくなんてばかげていませんか?」「やあ。こんにちは。私たちは冬にそなえていっしょうけんめいなんです。」

雨がざあざあふり続く日も、ありさんたちははたらいていました。きりぎりすは、葉かげでのんきそうにいました。「ありさん。こんな雨ふりの日にはたらくなんて、ばからしいですよ。」ありはいいました。「いやいや。さむい冬がやってこないという年はありませんからな。」やがて秋になりつめたい風が吹きはじめました。ありさんは風にふきとばされそうになりながらいっしょうけんめいたべものをはこびます。「ありさん。ありさん。こんなに風のつよい日にはたらくなんてばかばかしいとはおもいませんか?」「やあ、かしこいきりぎりすさん。ふゆのしたくは、もうすまされたのですか?」秋もあつというまにすぎ、草木はかれ、かれ葉がそらにまうつめたい冬がやってきました。雪がちらちらとまいはじめました。「ぶるぶるぶる。おおさむい。おなかがすいてしにそうだぞ。」夏はあそんでいても、たべものにこまりません。ところが冬は、どこにもたべものが見つかりませんでした。やがてあたりはまっしろな雪におおわれました。おなかをすかせたきりぎりすは、さむさとつかれてとうとうたおれてしまいました。そのときむこうにありさんの家が見えました。「そうだ、ありさんにおねがいで、たべものをめぐんでもらおう。」「ありさん。ありさん。ほくに食べ物をめぐんでください。」ありさんはドアをあけていいました。「さあさあ、おはいいなさい。でもきりぎりすさん、夏の日や雨の日に、私たちがばかにしてわらったことをおぼえているでしょうね。はたらくことのたいせつさがこれでわかりましたか?」

この物語から私たちが学びとれることとは何でしょうか。

1. まずはメインテーマである努力すればむくわれるということ。アッラーは努力すればかならず報償をあたえてくださいます。しかし、きりぎりすのように楽をし、努力をおこたった者にはそれなりの結果がついてきます。
2. きりぎりすがありを馬鹿にしたように、私たちもひとをばかにしてはいけないということ。それは必ず何らかの形で自分自身にもどってきます。
3. さむい冬がやってこないという年はありませんからなとありさんがいいましたがイスラームに置き換えれば、死なない人間はいないということです。アッラーに裁かれない人はいません。アッラーにお会いできる日をしんじて努力をおこたらないべきです。
4. ありさんはいくらきりぎりすにばかにされても文句一ついいませんでした。なんという忍耐と広い心の持ち主でしょう。来世をつねに考える人は現世でなにを言われても気にならないということもあるのでしょうか。
5. 最後はありさんの寛容さです。いろいろひどいことを言われ続けてもありはきりぎりすを家にいれてあげました。イスラームをつぶそうとがんばってきたイクリマがムスリムになりたいと預言者さま(SAW)のもとをおとずれた時、ようこそといって受け入れた預言者さまをおもいうかばせませす。困った人や弱い人を助けるのもムスリムのぎむです。」



### アスマの慈善の喜捨

アスマはアッラーの道のために費やすことはなほ大胆であった。当初の頃彼女は計算して使っていた。ある時み使いが彼女に言った。

おお、アスマよ！そう勘定高くしてはならぬ。アッラーの道のためには、顧慮することなくできるだけ使いなさい。

その後、彼女は最も気前よく使い始めた。彼女は娘や女中に言うのであった。

アッラーの道に使うためには、過大や必要な超過は顧慮するものではありません。そうでないと要求が増加するに従って、余分に何かを得る機会がかえって次第に遠くなり、アッラーの道のために使うことのできる時が来たときは、ついに何もこないようになるでしょう。慈善のために費やすのに遅れをとらぬよう注意しなければなりません。

こんな人々は貧困であってもここは裕福で寛大である。今日ムスリムは貧困を訴えているが、かれらはサハーバの常であったほど、貧困している者はないであろう。数日間食べ物もなく飢えの苦痛を忍ぶために、腹の上に石を縛って耐えていたことは前述のとおりである。



購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部 200円（日本以外は1部 250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号： 00140-4-574489 口座名義： Yasuragi

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> [info@yasuragiweb.com](mailto:info@yasuragiweb.com) [yasuragi\\_nihon@hotmail.com](mailto:yasuragi_nihon@hotmail.com)

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部